

振り返れば六甲の山並み～あの頃の友に会いたい

## 第13回 神戸大学&文学部ホームカミングデイ2018

— Kobe University Homecoming Day 2018 —

10/27(土)

### 神戸大学ホームカミングデイ2018

10:30～記念式典  
 於：出光佐三記念六甲台講堂(登録有形文化財)  
 12:00頃～ランチ・パーティー(記念式典終了後)

※詳しくは 下記のホームページをご覧ください。

第13回 神戸大学 ホームカミングデイ 検索



KOBE UNIVERSITY

誘い合わせて、お気軽にお越しください!

### 文学部ホームカミングデイ2018

13:00～13:30 受付 文学部 A棟1階エントランスホール  
 13:30～13:40 文学部長挨拶  
 13:40～15:00 講演  
 「神戸から考える“もののあはれ”と現代日本  
 村上春樹/内田樹の問いかけをうけて-」  
 嘉指 信雄教授(倫理学)  
 15:00～15:20 学生によるスピーチ  
 15:30～16:00 第12回文窓賞(学生レポートコンクール)  
 授賞式 及び受賞者スピーチ  
 16:00～16:20 文窓会総会  
 16:30～18:00 懇親会 瀧川記念学術交流会館  
 (参加費：3,000円/当日)

<併設企画> 12:50～16:30  
 (文学部 B棟132教室前)  
 教育研究プロジェクトの活動記録など

■お問い合わせ先 人文学研究科総務係  
 〒657-8501 神戸市灘区六甲台町1-1  
 Tel: 078-803-5591

文窓会(文学部同窓会)ホームページ  
<http://www.kobe-u.biz/bunsokai/>

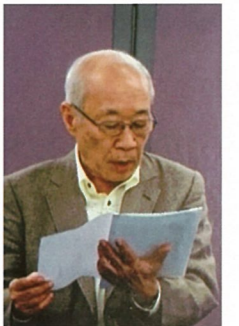
「神戸から考える“もののあはれ”と現代日本」講演者：嘉指 信雄(かざし・のぶお)教授(倫理学)プロフィール  
 1953年生まれ。東京外国語大学修士。エール大学哲学博士。広島市立大学助教授などを経て、2001年より神戸大学文学部教授(来年3月退官予定)。専門は現代哲学、近代日本思想、平和研究(核問題)など。主な著作「西田哲学選集/第五巻・歴史哲学」(編・解説、1998)、「哲学の21世紀—ヒロシマからの第一歩」(1999)、「終わらないイラク戦争—フクシマから問い直す」(共編著、2013)など。アメリカ哲学会ウィリアム・ジェイムズ賞(1991)、「平和・協同ジャーナリスト基金」奨励賞(2008)、「科学技術社会論・柿内賢信記念賞」実践賞(2012)受賞。

\*第12回文窓賞(学生レポートコンテスト)入賞者の作品は、ホームページ「文窓」でお読みいただけます。

### (今年はぜひ、あなたも輪の中に!) 第12回文学部ホームカミングデイ2017(10月28日)の様子



神戸開港 150 年にちなみ国史の奥村弘教授が「神戸の都市イメージの歴史の変容を考える…」を講演。神戸市の成立、歴史性、複層的な地域イメージを大切にすることが重要であるなど地図を広げ分かりやすく講義されました。参加者約 60 人のなかには奥村教授の教え子だった人も見られました。学生によるスピーチはドイツ美術専攻の大学院3年生・藪田淳子さんがドイツ・レーゲンスブルクに留学し学んだことを報告しました。同窓会総会は武藤美也子会長の議長・議事進行で行われ、平成 28 年度事業報告、同会計監査報告、平成 29 年度事業・予算案を承認。終身会費 3 万円を平成 30 年から 4 万円にする終身会費改定案が提案、承認され、とどこおりなく終わり、会場を近くの瀧川記念学術交流会館に移しての懇親会では、同窓生、先生方、現役学生ら約 50 人が歓談しました。



### 特集/私と本 文窓賞応募者のその後

第12回文窓賞 2018年 学生レポートコンクール結果速報!  
 文学部ホームカミングデイ 2018 [10月27日(土)]





## 新学部長ごあいさつ

人文学研究科長・学部長  
文窓会名誉会長 奥村 弘

文学部の前身である文理学部が1949年に神戸大学に設置されて、来年で70年になります。第1回入学案内で、私たちの先輩は人文学の社会的役割を強く主張しました。同案内では、明治以来の近代化の中で、基礎的な学問の探求と、それを通じて養われる科学的精神の育成が軽視され、敗戦後もそれが続いているとして、日本社会が世界的な文化水準に達するために「基礎的な学問軽視の弊風を徹底的に改め、科学的精神を身につけた健全な市民を育成することが最も急務である」と述べています。

この理念のもと、文学部は、多くの卒業生を送り出すとともに、教育研究体制の充実を持続的に進め、1968年に文学研究科修士課程を設置、1979年に文化科学研究科を設置、2007年に文学研究科・文化科学研究科を改組し、人文学研究科(博士課程前期課程・後期課程)を設置してまいりました。私も卒業生の一人として、このような場で学問を深めることが出来たことを誇りに思っております。

現在、グローバル化が急速に進み、社会のあり方や価値観が大きく変動し、それに伴う軋轢も増大しています。また地球温暖化の進行による大規模な自然災害が頻発し、日本列島では大規模な地震災害が日常化

し、人間の存在自身が大きく脅かされる状況も生まれています。その中で人間のあり方を根源から問う人文学の役割はますます重要になっています。私たちは学部創設時の理念を大切に、15専修を基礎とした少人数教育を堅持し、オックスフォード大学等と提携した国際交流カリキュラム、国際港湾都市神戸という魅力的な場を介した地域社会の中での実践的教育カリキュラムなどを通して、古典的な学問を継承し、新たな文化を創造しうる人材を社会に持続的に輩出していきたいと考えております。

しかしながら、現在、人文科学を軽視する風潮は強まっており、残念ながら文学部の学生定員も115名から100名に削減されています。70年を迎える今日、このような風潮に抗して、私たちは人文学の今日的な役割を社会に積極的に発信していきたいと考えております。昨年度、神戸大学は、大学出版会を発足させました。出版会最初の刊行物『地域歴史遺産と現代』は地域連携センターの成果によるものです。またアスベスト問題を扱った松田毅・竹宮恵子監修『石の綿』は、倫理創成プロジェクトの研究蓄積を基礎にしています。今後も、研究科として積極的に出版活動に取り組んでいきたいと考えております。さらに来年3月には、表現手段としてのマンガの持つ役割について、70周年キックオフシンポジウムも開催の予定です。人文学が大切にされる社会をめざして、努力していきたいと存じます。なお一層のご支援ご協力をお願いする次第です。

最後になりましたが、文窓会会員の皆様のご活躍とご健勝を心より祈念申し上げます。



## 人文学の火を守ろう

文窓会会長  
武藤 美也子

文窓会会員の皆様、今年はこの他の異常気象に見舞われました。「平成30年7月豪雨」と名づけられた豪雨は6月28日から7月8日まで1週間以上も降り続き、特に西日本に大きな被害を与えました。被害に遭われた会員の方々並びにご家族の方々には、心よりお見舞いを申し上げます。その後追い討ちをかけるような連日の猛暑。今までは考えられない40度を超える気温を記録した地域もあり、「命に関わる危険な暑さが続きます」と連日テレビは熱中症予防への呼びかけを行っていました。この会報が届く頃にはいくらか涼くなっているとは思いますが、みなさま、お元気で過ごしていただくことを心よりお祈りしております。

今年の研究科長・学部長が奥村弘先生に代わりました。上掲のご挨拶でも書いていらっしゃるように入文学の大切さを社会にアピールしていこうとおっしゃっています。そして文学部は来年70周年を迎え、同窓

会もそれなりの歴史を積んできたということです。また奥村先生は神戸大学文学部の同窓生でもあります。奥村先生と協力し合い、同窓会も70周年に向けて、来年は同窓会の歴史を振り返ってみたいと思っています。また会員の方々にご協力をお願いすることがあると思います。その時にはどうぞよろしくお願いいたします。

今年から入学手続きが原則郵送化になりました。その結果我々同窓会役員が新入生と直接会って文窓会のことを話す機会がなくなりました。この入学手続きでの新入生との接触は、我々にとって新鮮で貴重な新入生を知る機会でした。それができなくなってしまったことは残念です。その結果同窓会費納入率も11%下がってしまいました。去年の定員減に加え、文窓会にとって経済的に大きな痛手です。

文窓会は同窓会誌『文窓 ふみのまど』の発行、文窓賞での学生支援、新入生歓迎ティーパーティ、卒業祝賀パーティ、文学部やオックスフォード留学生への支援等、活動の幅を広げてきております。それらは全て同窓生会員の方々からの会費・協力金で賄っております。

人文学の火が消えないように、文窓会も学部とともに頑張っていくつもりです。今後とも一段のご協力をお願いします。

神戸大学文学部生の人間力・文学力・未来を応援する

# 第12回 文窓賞 2018年

学生レポートコンクール 結果発表

神戸大学文学部に入学し、学生生活においてチャレンジしようとしていること、なしたものの、また、今考えていること等についてレポートしてもらう[文窓賞 学生レポートコンテスト]に、今年は6作品の応募がありました。8月9日に選考会を行い、受賞作として、優秀賞1名と佳作2名が選ばれました。

### 優秀賞 (賞金5万円と表彰状)

#### 「愚かで奇怪な蝙蝠」

瀧井 建仁(社会学博士前期2年)

「一橋大学アウトティング事件」につき、一橋大学から受け取った論文は作者に大きな衝撃を与えた。一橋大学ロースクールの男子学生の死とからめながら、両性愛者の代名詞である「蝙蝠」にたとえながら性的マイノリティの生き方を探っている。

LGBTだけでなく、当たり前だと思われている多くの事や様々な常識は、本当に当たり前なのだろうか。人間の生き方、感じ方等々の多様性について考えさせられるレポートであった。選考委員の大多数が優秀賞に選んだ。

### 佳作 (賞金1万円)

#### 「フィリピン留学記」 辻 啓人(フランス文学専修5年)

英語留学先のフィリピンで、教師に誘われバギオへの週末旅行に参加する。ナイトマーケットで珍しいアヒルのバルートを食べるなどの経験をするが、旅行費用について同じ語学学校の日本人留学生から言われたことから、「国際交流ってなんだろう」と考え始める。描写が具体的に情景が浮かんでくる。これからは本当の国際交流を考え、そして、行動してもらいたい。

#### 「『書く』ことについて」 成田 まお(社会学専修2年生)

「『書く』ことは、人間として生きるために必要不可欠な行為」と作者は語る。自分を見つめ、深めることができる。同時に、一義的・固定的に捉えることのできない現実を「書く」ことで固定化してしまう危険性(負の側面)についても言及する。「書く」ことを掘り下げた、文学部生らしいレポート。次回は、実際に書いた作品を期待している。

### 選考を終えて

昨年は10作品の応募があったが、文学部の意義、そこで学ぶ自分とは、といった内面を思考する作品がほとんどであった。それぞれどう成長していくのか期待している。「5万円ください」という新しい(?)文体の作品があった。私は、文章に絶対的な規則はないと思っているが、美しい日本語には

やはりこだわりがある。個性をなくさず、いろんな面で「もう少し」を重ねて、選考委員をうならせる作品を書いて欲しい。その時、私たちは喜んで「5万円」を進呈します。

(文責 審査委員長 西川京子)

#### 選考委員

奥村 弘学部長(日本史学教授) 鈴木 義和副学部長(国文学教授) 白鳥 義彦副学部長(社会学教授) 武藤 美也子 日高 健一 三宅 征彦 田中 賢司 廣野 幸夫 吉田 浩次 西川 京子 坂本 直樹 河島 真 津田 薫

文学部と本とは切っても切れない関係。しかし、世間では活字離れが進んでいます。今回は同窓生、現役学生、教員に「私と本」の主題で書いていただきました。あなたにとっての本はどうでしょう？

おこ  
火を熾す人々

山根 彩花(英米文学専修・3回生)

地元から神戸へと戻るバスの座席にもたれかかり、山を分断するよう通る高速道路から流れる景色を眺めて



いると、どこからともなく漂ってきた煙の匂いが締め切った窓から忍び込んでくる。誰かが何かを燃やしているのだ。車内灯が眠る乗客を白々しく照らす中、離れゆく故郷を思うわたしの心をこの煙はやけにひりつかせた。それによって、この山奥のどこかで揺らめく炎と、その傍らに立つ人へ思考は引き寄せられていく。

もう何年も自分の中で轟々と燃え続けている言葉がある。J.D. サリンジャー『フラニーとズーイ』の最後の一節だ。洗練された筆致で描かれる短編「フラニー」と難解で宗教的な議論が展開される「ズーイ」から成るこの物語は、ラストシーンでズーイが妹フラニーに語る話によって、自分の人生で最も重要な小説になっていると言っても過言ではない。それはズーイが幼少期出ていたラジオ番組に機嫌を損ねて出演しなかったとき、一家の長男であるシーモアから言われた「太ったおばさん」の話である。「おまえは太ったおばさんのために靴を磨くんだよ、彼はそう言った。(中略)太ったおばさんっていうのが何を意味するのか、彼は説明してくれなかったけど、それ以来番組に出るたびに、とにかく太ったおばさんのためにせつせと靴を磨いた」ズーイは自分の抱く「太ったおばさん」のイメージを話す。「そのおばさんはね、一日中ポーチに座って、蠅を叩きながら、朝から晩まで馬鹿でかい音でラジオをつけっぱなしにしているんだ。その暑さたるやすさまじいもので、彼女はたぶん癌を抱えている。そして(中略)シーモアがどうしてあの番組に出る前に僕に靴を磨かせたのか、分かった気がした」この話を彼は次のように結論づける。「シーモアの言うところの太ったおばさんじゃない人間なんて、誰ひとりいないん

だよ。そして(中略)その太ったおばさんというのが実は誰なのか、君にはまだわからないのか？(中略)それはキリストその人なんだよ」太ったおばさんという、無名で、喜劇性と悲劇性を両方持ち合わせた存在。それこそがあなたであり、わたしであり、キリストその人なのである。あらゆる垣根を超えた、「人類」のために自分の靴を磨く——それはサリンジャーという作家の、日々を生きる人々への敬愛の念に他ならないのだ。そう思うと、どうしようもなく心が震えてくるのである。

そしてわたしは、炎を囲み、もう消滅してしまった言語を操り、獲物について話すかつての我々の姿を夢想する。その日から、わたしがこうしてパソコンに向かって今日まで、世界中で無数の本が人類の営みを記録し続けてきた(文学だけに限らない、文字通りあらゆる「本」だ)。そこに描かれた、考え、感じ、語っていく「火を熾す人々」の姿を思い、それがいかなる場所や時代でも変わらないと気づくとき、わたしは手の中のずっしりとした紙の重みにはっと驚かざるを得ない。

忘却を読む

神谷 菜音(哲学科4回生)

本を読んでいると、時々はっとするほど心惹かれる言葉に出会う。忘れたくない。切り取って持ち運びたい。出来るなら、永遠にその言葉たちを見つめていたい。けれど、私はそれをどこかに書き留めたりすることはしないと決めている。書けば忘れてしまうからである。

昔から物覚えが良くない。暗記は苦手だ。思い出話では「そうだった？」ばかり言っている。メモはどこかに置いてきてしまう。メモを開けた瞬間に書き留めたことを忘れてしまう。書いて安心すると、書いたことも忘れてしまうし、忘れてしまったことさえ忘れてしまう。



忘れながら生きている、と思う。辛かったこと、嬉しかったこと、悲しかったこと、素晴らしいことを忘れなければ生きていくことはできない。喜び続けること、悲しみ続けることはできないのだ。悲しみを忘れて喜び、喜びを忘れて悲しむ。そうして忘れながら、人は生きている。

昔、私は忘却について「愚かで儂く美しい」と言ったことがある。今もう一度言うとしたら、それは愚かでも儂くもない。ヒトは忘れる生き物だ。生きるために忘れることは、合理的で、不可欠で、けれどとても美しいと思う。喜びも悲しみも忘れて、私たちはただ今を生きていることができる。忘れた喜び、忘れた悲しみを抱えて生きる人々を愛しいと思う。

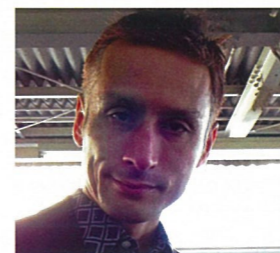
時々振り返って、忘れてきたものを思い出す。いつまでも覚えていられない、その罪を省みなければならぬ。私にとってそれが読書だった。本を読むと、失くしてしまった大切な記憶があることを感じた。それはぼんやりとしてはっきりと見えないけれど、たしかに私の一部だった。忘れたことさえ忘れていた、それを思い出させてくれた。手の中にある物語を忘れていく自分と、忘れたことを思い出すいつかの自分を見せてくれた。そして今、その一瞬を生きている自分に気付くのだ。

美しい言葉や景色、愛すべき文章や時間。それをはじめて目にした時の驚きと喜びと、それを忘れてしまうことの淋しさだけは忘れないように、私は言葉を忘れていく。忘れた言葉を、記憶を悼むために、今日も本に手を伸ばす。

厄介な本たち

茶谷 直人(哲学/准教授)

私は、文学部の他の教員のみなさんと同様、本を「読み、考え、書く」のが仕事だ。だから、「私と本」と言われれば色々書きようがあるだけに却って迷ってしまう。とはいえ、私の専門は古代ギリシア哲学なので、ふだん私が取り組んでいるプラトンとアリストテレスについて、それぞれの書いた本がいかに「厄介な本」であるかということ、全然知らない人にも漠然とイメージできるよう簡単に話してみたい。



まず、アリストテレスの本は厄介だ。なぜならそもそもそれは本でさえないからだ。すなわちそれは公刊目的の書物ではなく、かれが自分の学園(リュケイオン)での講義用に準備したノートを、後代の人が(講義題目のようなタイトルをつけて)無理やり「本」にしてしまったものにすぎない。となるとその文章は、講義内容のエッセンスを極度に簡潔的に記しただけのものだったり、講義を行う本人さえ分かればいようなぶっきらぼうなものだったりしても致し方がない(たとえば大事な点は読者に理解してもらうようふつう何度も繰り返すものだが、どこが大事か最初から頭の中に入っている本人はそんなことをしなくてもよい)。一言でいえばそれは不親切な文章なのだ。しかしこの不親切さは、「面白さ」と表裏一体だ。というのも、何が言いたいのかを読み解こうとするわれわれの試みの可能性に豊かな幅が与えられ、地道に丁寧にその試みを遂行すればするだけその者に知的な見返りが与えられることになるからだ。

次に、プラトンの本も別な意味で厄介だ。かれの書物は「対話篇」と呼ばれ、かれの師ソクラテスが様々な人々と多種多様なテーマについて議論した模様をシナリオ形式で描いたものだ。しかしこれが厄介だ。確かにソクラテスは実際に日々街の広場や社交場で人々と対話を行うことをライフワークとしていたけれども、プラトンの書いた対話篇に登場するソクラテスが語る内容がどこまで実在するソクラテスが語った内容なのか、あるいは、そんな対話をそもそもどこかで誰かが行ったのかさえよく分からない。もちろん、そんなことは気にせずに純粋に「フィクション」として味わってもよいのだが、そこで描かれるソクラテスは怖いほど頭が切れ皮肉屋で修辭好きの人物なものだから、作品の中のかれの発言の真意(どこまで字義通りのものなのか、字義通りでないとするればどんな真の意図や裏の意味があるのか)は、ざっと読んだだけでは掴みにくい。かくの如くかれの本は厄介なわけだが、しかしそれは「面白さ」と表裏一体の厄介さだ。というのも、プラトンはソクラテスの考えをどこまで受け継ぎどこから独自の道を歩んでいるのか、一体ソクラテスはその発言によって何を対話相手に伝えたいのか、そしてさらに言えば、「ソクラテスは何を対話相手に伝えたいのか」について作者プラトンは読者にどんな風に

読み取って欲しいと思って書いているのか——こうしたことについて、豊かな読みの幅が与えられるからだ。このように、プラトンにせよアリストテレスにせよその本たちは、丁寧に繰り返し読む人にだけその手間に応じた面白さが与えられるという、「厄介な面白さ」を備えた本たちなのだ。

## 私の読書遍歴

金澤 佳子(フランス文学専修・平成23年卒業)

阪急六甲駅に本屋が出来たのは、私が中学生の時だったかと思いません(下宿生よりも神戸大学に近いところに住んでいました)。



その日、下校したものの、朝、鍵を持ち出すのを忘れたがため家に入れなかった私は、反抗期真っただ中、己が迂闊さではなく留守の家人を恨みながら駅の本屋で時間を潰していました。その時に『星の王子さま』を手にとったことから私の読書遍歴は始まりました(仏文の恩師はお笑いになるかも知れません)。王子さまとキツネの交流に、思春期の孤独な(つもの)心が癒やされるのを感じたものです。それから、自分の胸の内と同じものが本の中にだけあるとばかりに、アメリカのヤングアダルト小説などを読むようになりました。その頃は本屋に入ると力が湧いたものでした。読むべき本がまだこんなにある、ここにある未知の一冊を読むために明日も生きられる、と。

そんな悩み多き時代は、ぼんやりと受験勉強に明け暮れるうちに過ぎ去り、読書は趣味だと考えていたにもかかわらず、私は文学部のフランス文学専修に、大学院に進学するほどまでに落ち着きました。そうすると駅の本屋はもうパワースポットではなくなりました。あの本も読んでいない、この本も読んでいない。本屋に入ると未読の本の山が不勉強な私にのしかかってくるのでした。

そして、地元を離れ、幼児のいわゆるワンオペ育児中の今、もはや本屋からはめっきり足が遠のいてしまいました(先だって大学院の後期課程を中途半端に

退学してしまったところで、本来このような場に顔を出すのは憚って然るべきなのですが、久しぶりに文章を書きたい欲に駆られてしまいました)。最近読んだ本といえば、育児書かレシピ本か絵本か、ようやく、高崎順子『フランスはどう少子化を克服したか』(新潮新書)といったところです。先輩に「絵本もまた文学」と言われ、ハッとした気がしましたが、プーやらプーやらとしか書かれていない本に文学を感じるのやはり難しい今日この頃。子は子でテレビやスマホへの興味が強いようで、悩ましいですが、本だって誕生した数千年?前は眉唾物と思われていたんじゃないかなどと妙な言い訳を考えています。今は、昔、妹と私が寝床に入った後、夜を徹して『赤毛のアン』全巻や『風と共に去りぬ』全巻を読んでいた母のように、読書の情熱が再燃する日は来るのかと、それを待つ身です。

\*旧姓・岡田(ヨーロッパ文学・平成25年博士課程前期修了・平成29年後期中退)

## 本と私

鞍井 修一(国文学専攻・9回生)

昭和20年3月、神戸大空襲で家が焼けた。最後まで燻り続けたのは本であった、と父はよく話していた。



昨年夏マンションに引っ越した。居住スペースは1/3以下、諸々の物を処分した。本も様々な形で整理した上で自分の部屋に持ち込んだが、まるでゴミ屋敷の体。電通定年退職後20年近く専門学校の学校長をしていたので学校図書館に車で3度運び込んだ。

50歳を前に丸谷才一と出会いすっかりファンになった。知識と教養に裏付けされた「をかしみ」と人間愛、都市人に対するささやかな羨望と皮肉、しかし決して斜に構えてはいない。逆に江戸前の粋と洒落さを大切に、野暮を嫌う山口瞳も好みである。読み疲れず、素直にうなずける。丸谷と山口は全集の様なものは手元にはない。唯、出版される毎に本屋が一冊一冊届けてくれた。大江健三郎も同じくである。ちょっと変わったところでは、抹香町もので知られる川崎長太郎自選全集も手元に残した。

海外に目を向けるとサルトルの哲学と文学が世界で最も読まれていた時代に大学生となり指導教官は小島輝正教授。サルトル、ポーヴォワール、カミュはほぼ手元に残した。サルトルに見出されたジャンジュネ全集も小さな本棚の一角を占めている。

明治150年の今、近現代文学の中で最高の作品をもし挙げるなら私は迷うことなく大西巨人の「神聖喜劇」である。1955年に書き始め25年掛けて完成。その間は全くの無収入、「これ以上ないくらいの貧乏」に家族は苦しんだらしいが、不思議なことに何処かユーモアと余裕すら感じる。主人公は英、独、仏語に通じ類稀な記憶力の元、上官を翻弄する。快作ですよ。

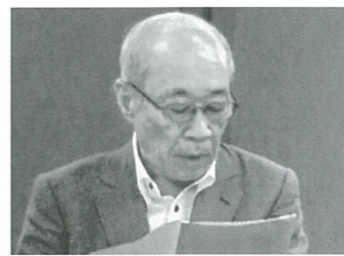
昨年転居のため職人さんたちが出入りしていた。最終日、親方が「鞍井さんは電通にお勤めだったそうですね」「はい。」「それではサントリーのお仕事も」「いえ、サントリー奨励賞の審査委員はしていましたが。」「山口瞳、開高健、柳原良平さんたちもご存じで?」「いえ開高健さんと少しだけ、しかも長良川河口堰反対運動で」「私、開高健が大好きなんです」「え、それでは開高健の随筆全集をもらって頂けませんか」「本当に頂けるのですか」。急いで梱包し全集を手渡した。すごく喜ばれて何度も何度も礼を言ってワゴン車に持ち込んだ。その車が角を曲がるまで見送った。

それでも行先のなかった本は資源ごみ回収の日に、何度かに分けて出した。処分場で何時までも燻り続けたであろう私の本、私の心の中では未だに燻り続けている。

## 私の読書歴

廣野 幸夫(社会学専攻・16回生)

会社をリタイアした時、大学の演劇研究会時代の友人が参加していた男性だけの朗読グループに参加した。



このグループの拠点は当初大阪新世界、練習の後で隣の居酒屋での一杯があるというのでそれに惹かれたのかもしれない。アクセント・イントネーションなど朗読の基礎勉強のため朝日カルチャーセンター

の朗読教室に通い始めた。岡倉天心「茶の本」、森鷗外「高瀬舟」「最後の一句」「じいさんばあさん」、中島敦「山月記」、島崎藤村「夜明け前」、小泉八雲「怪談」、松本清張「日本芸譚」など声に出すと非常に心地よいし、物語もよく構成され感銘する作品、朗読に適した作品である。最近の読書はこの様な作品を探すのにも振り向けている。

学生時代は高橋和己「邪宗門」堀田善衛「審判」柴田翔「されどわれらが日々」大江健三郎「万延元年のフットボール」などいわゆる純文学を読みふけた。

就職後は映画の仕事に10数年携わった。そんなことから映画鑑賞からその原作を読む、または既読の小説の映画化作品を楽しむ。したがって、この頃以降は内外のミステリー・サスペンス・歴史小説などが読書の中心になる。

そんな中で私がもう一度読んでみようと思っている作家の作品を紹介しよう。

F.フォーサイス「ジャッカルの日」「イコン」「神の拳」、K.フォレット「針の眼」「大聖堂」、D.フランシス「競馬シリーズ」全45作、R.ラドラム「暗殺者」「砕かれた双子座」「マタレーズ暗殺集団」、J.グレンシャム「依頼人」「評決のとき」など全作品、J.ダウニング 元刑事の古書店主を主人公にした「死の蔵書」「愛書家の死」など5作、吉川英治「新平家物語」「私本太平記」、白井吉見「安曇野」、山崎豊子「大地の子」「不毛地帯」、井上ひさし「吉里吉里人」「四千万歩の男」、五木寛之「親鸞」

以上はほとんどエンターテインメント作品であるが、すべての作品が歴史・宗教・地政などの好奇心をそえられるものである。もちろんこれらの作品以外にも松本清張・水上勉・井上靖・深田久弥・北杜夫などの作品は再読したいものだ。(※\_は劇場映画化作品)

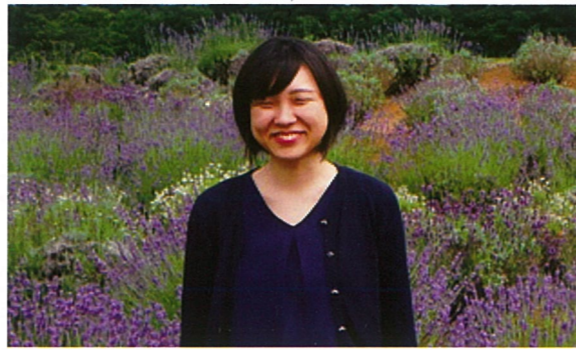
最近、待ち望んでいた原寮作「それまでの明日」が刊行された。私立探偵・沢崎シリーズの6作目14年ぶりの新刊である。ハードボイルドタッチのミステリーで主人公の少しシニカルでぶっきらぼうな態度はなかなか魅力的である。物語も現実でありそうな事件を素材にしているだけあってなかなか面白い。30年ほど前の第1作「そして夜は甦る」以来の付き合いである。私の読書は、ひとたび面白い作品に出合うとその作家の作品を片っ端から読まない気が済まないというこだわりがあるようだ。

## 言葉とともに

赤羽 佳奈子 (国文学専修・2018年卒業)

神戸大学文学部を卒業して数か月。私は今、出身地である長野県の地方紙、信濃毎日新聞の記者として働いている。寄稿の機会をいただくに当たり、自己紹介も兼ねて大学での4年間を振り返り、なぜ新聞記者という職業を選択したのかをお話できたら—と思った。しかし、考えてみるとなかなか難しい。取材先で「どうして新聞記者になろうと思ったの?」と聞かれることも多くあるのだが、毎回私は困ってしまうのだ。なぜ新聞記者になろうと思ったのだろうか?この疑問符と向き合うためにも、少し遠のいてしまった大学生活、特に文窓会のレポートコンクールに応募し続けた4年間に焦点を当てようと思う。

大学での4年間はあまりにも自由で、とろとろとゆったり流れているようでいて、気づいたら目の前を過ぎている、というような感覚だった。普段からぼんやりとしている私にとって、4年間は何かを為すにはあつという間で、本で読んで気に入っていた「荏苒」という言葉がびったりだと思っていた。しかし卒業して改めて振り返ると、書くべきこと、書き切れないことが自分の中にたくさんあり、どこから振り返るべきか悩ましい。神戸での生活は何もかもが新鮮で、大学での学びは色鮮やかで驚きに満ち、気づいてみればとても実り



多い時間だった。

入学当時から、言葉に拘りを持ち続けたい—と考えていた。3000メートル級の山々に囲まれた故郷を遠く離れ、穏やかな海と控えめな標高の六甲山との間にある大学へ入ったきっかけが、言葉にあったからである。高校時代に言葉を大切にする恩師と出会い、古今和歌集の言葉の美しさに出会い、大学生活での目標を「言葉を選ぶ能力を身につけ、多面的に物事を捉えられるようになること」とした。1年生の頃に若さと衝動に任せて筆を執り、文窓会のレポートにそこへ至る詳しい経緯を書いたが、今では恥ずかしすぎて、考えただけで床を駆け回れる。初めて出したレポートを機に、一度自分の外に出してしまった言葉は二度と戻ってこないのだということを実感することになった。それはある種の恐怖であり、言葉に対する意識をより高めるきっかけともなった。

そのまま4年間、文窓会のレポートコンクールに応募し続け、取り留めのない日々をつらつらと綴ってき

た。毎年締め切り間近には夜通しパソコンに向かい、空白で埋まったままの画面を恨めしく眺めたものだったが、1年間の自分の考えを振り返る機会として、それを言葉にして自分の外側に出す機会として、苦しんだ経験は貴重な財産になっていると思う。まさか卒業後も同じ空白に苦しめられるとは考えもしなかったが。

レポートの時期は毎年、実学重視の傾向の中で人文学を学ぶことの意義について考えさせられるときでもあった。社会的な傾向など全く意に介さずに学んでいけばよかったのだが、そうはいかないほどに、人文学が軽視されていると感じる場面は多かった。社会に出てみた今、確かに「大学で学んだことが役に立った」と思う瞬間は少ない。しかし、思い出したように頭の中で繋がる瞬間があるのもまた事実である。私は直接誰かの役には立たなくても、ささやかに慎ましく心に侵入するのが人文学の良さだと学んだ。今後も記者という仕事を通して、ひっそりと回路の繋がる瞬間を楽しみ、その面白さをこっそりと周囲に伝えられたらと考えている。

新聞記者になりたいと思った経緯は今のところ、順を追って話せるような整然としたものではない。だが、言葉への拘りを持ち続けたいという思いや、人文学を大切にしたいという気持ちが影響していることは確かだと思う。長野県で育った18年間と、神戸

での4年間で得てきた色々な物事の破片が少しずつ積み重なった結果、行き着いた先が今の職だった。言葉を紡いで誰かに何かを伝えることはある種の消耗を伴うと知っているのに、それでもなお惹きつけられ、結局言葉で食べて行くことになったのが不思議である。

数か月間、記者として働いて、ますます言葉の怖さを実感する日々を送っている。自分の書いた記事が世に出ることはあまり喜ばしいことではなく、本当に取材先の方が伝えたいことを伝えられているのだろうか、この切り取り方で良いのだろうか、と不安になることの方が多い。本来ならば、自分の記事が世に出ることを誇らしく思えるくらいの自信がなければいけないと思いつつも、まだまだできることは少なく、周りの先輩方に助けていただければいいというのが現状である。今のところ自分が記者に向いているとは臆目にも思えないが、いつか、何とかこの仕事をものにしたい、という思いの中で怒涛の毎日過ごしている。

まだ生活は始まったばかりである。これまで通りぼんやりしているわけにはいかないが、着実に、真摯に、そして時にはしたたかに、言葉とともに歩んで行きたい。

文窓会では現役学生を応援しようと毎年「文窓賞」を設けています。赤羽さんは、在学中ずっと「文窓賞」に応募し続けてくれました。彼女がどのように成長していくのかを楽しみに見守りたいと思います。

## 私たちの同窓会

### 傘寿を迎え、京都へ同期旅行

小宅 信吾 英米文学専攻8回生 (昭和35年卒業)

5月の連休近くでしたが、旅行社にお勤めだった吉田さんのプランで京都も北のほうの鞍馬山や実相院など静かなところを訪ね、いわゆる観光地ではない京都の良さを味わうことができました。京都プリンスホテルに1泊し夜は近くの湯葉料理のレストランで会食、京都は何度か訪ねそれぞれ趣のある旅行となっています。みんなの住んでいるところが関西と関東に分かれているので、なるべく中間の場所を選んで集まっていますが、前々回、静岡の寸又峡では河原崎さんが旅館で、倒れて救急車で病院に運ばれ



たのですが、助からなかったことが悲しい思い出となっています。

傘寿を迎えこれからどうするかまだ決まっていますが、同じ文学部で学んだどうし、元気で過ごしたいものです。

## 私たちの同窓会

### 龍野町・御津町室津へ同期旅行

武藤 美也子 国文学科16回生 (昭和43年卒業)

5月30日から一泊二日の同期旅行です。毎年1泊旅行を実施しているのですが、この頃は同期生が住んでいる土地を訪ねようということになり、龍野・室津に行つて来ました。龍野は「赤とんぼ」で有名な童謡作家・三木露風の故郷であり、素麺掛保乃糸と醤油の町でもある。童心に返り「赤とんぼ」を歌いながらボランティアガイドの案内で、昔の面影が残る武家屋敷通りを散策。

翌日は『風土記』に地名説話を残す良港「室津」へ。賀茂神社に登り、シーボルトが「日本の美しい景



色」と絶賛した瀬戸内海の景色を見る。『万葉集』に山部赤人が切なく望郷の歌に詠んだ唐荷島を、今も目の前に望むことができる。この日は赤人が故郷を思い湿る心と同じような小雨の降る室津であった。

今年も国文の者には興味ある地域を訪れることができ、来年の再会を約して帰途についた。

## フランス文学専修 ～博士課程前期生の目から

田村 知也 フランス文学専修 博士課程前期課程1年(10月からパリ・デイドロ第7大学に交換留学)

フランス文学専修博士課程前期1年の田村と申します。私は学部生の2年後期からここに所属していますので、この仏文専修との付き合いは今年で4年になろうとしています。

この専修最大の特徴は、学生と教員の距離の近さにあります。先生方は授業終わりなどによく研究室にいらっしやって、学生に対しても気さくに話しかけてくださいます。そのため研究室はもちろん授業も打ち解けた雰囲気となっており、少なくとも私にとってはたいへん居心地のいい空間となっています。

フランス文学専修のシンボルであります我々が松田先生、彼の魅力に惹かれて何人もの学生が仏文へと入ってきており、この現象は巷で「松田マジック」と呼ばれています。ポール・ヴァレリーにおけるエクリチュールのエロスを研究する彼の授業は、時に放送コードすれすれのものとなることもありますが、それもご愛嬌。テキストを精緻に読み解いた上でそこからどのように発想していくのか、どうすればテキストを面白く読むことができるかという、文学を研究する上で非常に重要な方法の数々を、先生の授業から学びました。

マラルメの研究者であります中畑先生は、その美貌で多くの学生を虜にしており、彼のファンはフランス文学専修内外、後を絶ちません。また彼の包容力はすさまじく、学生のしょうもない話にもしっかりと付き合ってくださいませ。ゼミや読書会などで議論の行く末が見えなくなった際も、幾度となくその道標を示してくださいました。中畑先生がいるから学生たちは好き勝手に自分の言いたい意見を言えているのだと思います。また、先生はお酒がお好きなのですが、そのために体調を崩されることが最近多くなってきたので、学生から度々注意を受けたりもしています。

仏文の授業は大きく二種類に分けられます。一つは、フランス語テキストを精読しながらテキスト中に出てきた単語や文法を学ぶ授業です。特に松田先生の授業では、今まで邦訳の出されていない現代作家のテキストを扱うことが多く、訳に頼れない分、より力がつくように感じます。二つ目は、作品



に関してみんなで議論をする授業です。こちらは演習やゼミと呼ばれていて、興味あるテキストを学生側から提示し、代表者の発表を聞いた上で意見を交換し合います。文学に関する議論をどのように展開していけば良いのか皆手探りな状態ではありますが、その読みをより豊かにするために日々作品と向き合い、卒論の執筆に向けて準備をしています。最近の卒論ですと、サルトルやセリヌ、ジュネ、クンデラ、デュラスなど、20世紀を中心とした比較的現代の小説家を対象としたものが多く見受けられます。どれも学生達が長いことゼミで議論していた内容であるため、非常に思い出深い卒論達です。

また、フランス文学専修は、代々活発に研究室行事を行っている専修で、何かにつけて研究室での食事が開催されています。ドイツ文学や美術史など、他専修と合同で行う新入生歓迎会などの大規模な集まりから、仏文専修を中心として行う小規模なパーティーまでたくさんの機会があります。最近ですと、先生方の誕生日パーティーや流しそうめんなどを行いました。仏文主催のもので、現役生だけではなくOBOGの方々もお仕事終わりによく来てくださり、非常に賑やかな会になっています。

同級生や先輩、後輩、先生方と多くの時を過ごした研究室にはたくさんの思い出が詰まっています。それは私にとってだけではなく、卒業されていた先輩方にとっても同じことだと思います。これからも神戸大学仏文の伝統が引き継がれ、良い学びの空間としてここが残っていくことを願います。

## 地理学専修の紹介

藤田 裕嗣 (地理学/教授)

文窓会会員の中には、地理学教室なんて、聞いたことはない、とお思いの向きも、おられるでしょう。それもその筈、教室の正式な発足は1994年度であり、長谷川孝治教授と大城直樹助教授に、文化財学講座担当の藤田自身が加わったのは1996年10月で、やっと20年を超えたところなのです。

それ以前に地理学を講じる教員は、教職課程との関係で、1名のみでの配置でした。教室の設立は、旧教養部の国際文化学部への改組と密接な関係がありますが、この点の詳細は、紙幅の関係から『50周年記念誌 御影・六甲の半世紀—神戸大学文学部の歩み—』(神戸大学文学部50周年記念誌編集委員会、1999年)の説明に委ねます。

その後の教員の変遷は、長谷川教授の定年退職後、原口剛准教授が2012年後期に着任しました。その半年後に大城准教授が明治大学に異動したと同時に、藤田が地理学に講座替えし、空いた文化財学講座に、さらに半年後に菊地真准教授を迎えました。このように、2012-3年度の2年間に劇的に変わり、新しく加わった2教員の経歴や専門等は、文学部のHPに説明されています。ご参照ください。

学問としての「地理学」は、高校「地理」で受ける印象とはかなり違います。今では高校地歴科の必修科目が「世界史」で、「地理」の選択を希望しても、文系では叶わないことも、少なくない、と聞かされています。地理学専攻生は、1学年6名、と限定されています。今年の2回生は、前年秋の希望者が初めて6名を超え、面接を行って厳選しました。准教授2名の学問的魅力とともに、地理学自体の幅の広さが、学生にも評価された結果であろう、と喜んでます。

地理学に特徴的な研究対象は、現地における景観であり、現地の観察も重ねる必要があります。それが示されている地図を求めめるために、資料館や図書館にも足繁く通って、資料を丹念に追う作業も不可欠です。観察から湧き出る発想も、研究にとっては重要です。知的関心を持つにしても、ある意味で孤独で、誠に地味な単純作業を繰り返すのが、唯一の方法であるのは、文学部全体に共通する、と言えるでしょう。

上述した研究手法は、「地理学実習」で鍛えており、単純作業からいかに論点を引き出すか、は、「地理学演習」(いわゆるゼミ)での議論が重要になります。他人の発表を聞いても、論理的思考を絶えず心



湊川トンネル実習風景(2017年6月10日)

掛け、発表者の前提から言えば、説明されたような結論にはならず、こう展開すべきではないのか、と提案できるような質問を、と指導しています。

学部生で優秀な卒業論文の執筆者は続出しているが、昨今の若手研究者を取り巻く環境の悪化が第一の原因でしょう。大学院進学にまで繋げるのには、苦勞させられています。とは言え、修士課程(人文学研究科への改組で博士課程前期課程)と博士後期課程は、各学年ほぼコンスタントに迎えられ、博士号取得者も順調に育っています。ちなみに、教室発足時にいた中国からの留学生が、博士号取得とほぼ同時に、北京大学に迎えられ、高等専門学校・大学の高等教育機関への奉職者は、学芸員も含めると、4名(\*)を数えます。学部から育て上げた博士号取得者が、まだ現れておらず、今後の課題と言えるでしょう。

ともかくにも、地理学共同研究室にはGISも操作できるパソコンが多数備えられており、昼休みを中心に学生や院生が集まり、談笑の声が絶えません。新しい地理学研究的息吹が感じられ、筆者は喜んでます。

さらに、新1回生を1年後に専修生として迎え入れるために、文窓会主催で開催いただいている新年度恒例の行事、「新入生ティーパーティー」で、今年度は、専修生として1年の経験を積んだ新3回生に対応をお願いしてみました。先輩たちとお菓子を食べながら談笑できるし、判らないことがあれば、親切に教えてもらえる、と、和気藹々とした雰囲気を伝えた上で、何に興味があるの?、こんなテーマも「地理学」なんだよ、とアドバイスしていました。これで、この秋も、我々教員は、多数の希望者から厳選する苦勞を味わうことになるのでは、と予想している次第です。

(\*)徐、阪野、上島、長谷川の各氏

## 3月27日 平成29年度 卒業生歓送パーティーを開催 (「LANS BOX」2階にて)

例年通り午後2時半より、文窓会主催の卒業生歓送パーティーが開かれました。

ここ数年天気恵まれず、雨や寒さに震える日が多かったですが、今年は素晴らしい青空でした。例年より早く満開になった桜が、若者たちの旅たちを祝福していました。

出席者は100名超。ある先生曰く、「昨年と違って、今年の卒業生は、人のスピーチもよく聴いてましたね。その年年のカラーがあるのですね。」

(取材：西川京子)



### 『私と本』：「あなたにとって本とは何？」卒業生にアンケートしました。

いろいろな答えがありました。

「心の拠り処たる友にして、自分の現状を省みる為の鏡、そして、自分の点を炙りだす教師。一冊の本といえど、折にふれ、読み返しては顔を変える万華鏡」

「先人たちが長い時間と労力をかけて結集した知識を、誰かの人生を、覗きみることができるもの。自分は何も知らないと言うことを知ることができるもの」

「暇つぶし(良い意味で)」ホントにそう、と納得です。特に、これから年を重ね、外で飛び跳ねる事が出来なくなる私たちシニア世代にとっては、面白い本は大切な宝物です。

文学部との係わりも、「私にとって本とは、文学部で勉強したいと思えたきっかけ」

「お守り。持っているだけで落ちつきます。文庫本も分厚い本も好きです」

肯定的な答えばかりではありません、「本はまとめです。いつからか、本を読んで満足できることが少なくなりました。それ以来、論文だけを読んだ」

発想を広げるにも役立ちそうです。「人間の恐さを楽しめるもの。実際におこってはいけないようなことも、本の中でならエンターテインメントと化すところが面白い。「他人の思考、人生、経験を追体験することのできる想像力を養うもの」

たくさんの回答をありがとう!

(文責：西川)

## 「文窓会」会員みなさまへ 文学部は来年70周年を迎えます。 来年の本誌「文窓 ふみのまど」は70周年特別号(予定)!

学部では平成31年3月2、3日のキックオフシンポジウムを皮切りに、いろいろな行事が企画されています。文窓会も70年の歩みを振り返ってみようと思います。読みやすく楽しめる内容でお送りする予定です。どうぞ、お楽しみに!

また、皆様にもぜひご協力をお願いいたします!

## 4月18日 2018年度新入生歓迎ティーパーティー、盛況! (文学部ロビー)

午後3時30分から始まったパーティーでは、参加学生が例年よりも増え、文窓会役員たちも一様に笑顔。同窓会長に続いて学部長の挨拶の後、ビュッフェスタイルでの軽食タイム。テーブルに並ぶ料理やスイーツに目移りしながら、学生たちのテンションも上がります。小腹が満たされた頃から、専門科目の名札の付いたテーブルに先生の話を聞くべく移動。今年は他のテーブルの先生の話も聞けるようにと、司会からも先生からも学生の移動を促すアナウンスを取り入れました。対象科目のテーブル周りに入りたくても入れなかった昨年までの光景は解消され、学生たちが入れ替わりに座って先生の話に聞き入る姿が見られました。

フードテーブルで筆者は面白い傾向を発見(?)。それは3月の卒業生を送るパーティーでは全く不評だったタコ焼きが、今回は多くの学生が必ずといってよいほどプレートに取ってどんどん食べているではないか。大学生活4年間で、何の変化が起こるのか?

さて、パーティー終了後、来年もよろしくお祈りしますとの言葉を複数の先生方からいただけて、小さくガッツポーズを取った筆者でした。

(取材：吉田浩次)



## 8月8日 神戸オックスフォード日本学プログラム (KOJSP)第6期生修了発表会と修了式を挙行 (瀧川記念学術交流会館)

今年で6回目の留学生は男子2名、女子7名の9名で、国籍はイギリス、アメリカ、中国、スロバキアとさまざま。オックスフォード大学の国際性を感じさせます。学生は日本の大学2年生に該当し、平均21歳。昨年9月末に来日、神戸大学の国雑寮に入寮し10か月余り学んできました。その間、文学部の学生がチューターとしてサポートしました。

ひとくちに「日本学」と言ってもテーマはさまざま。例えば「集団主義と個人主義の違い：和の効果」「北条政子の権力形態」「日本の銃規制についての西洋人の意見と理解」「明治維新が日本人の西洋観・近代化観に与えた影響」「滋賀県針江における持続可能な水利用」など。発表はすべて日本語で行われ、時々つまりながらもかなり滑らかで、研究の成果がよく理解でき、また質疑応答も日本語で行われました。

このあと、修了式、同会館の食堂で場所を変えて修了パーティーと続き、歓談。留学生たちは日本の感想を聞かれ「うーん。むし暑い。イノシシに出遭ったし…、坂道がしんどい。大雨…いろいろ体験し、すごい1年だった」と振り返っていました。8月末までには日本を離れ、イギリスに帰る彼ら。よい思い出を持って日英の強い絆になることを祈っています。

(取材：田中賢司)



# 東京支部だより

## I. 文窓会「東京支部総会」を開催

**開催場所** 東京六甲クラブ

**開催日時** 2017年11月9日 木曜日

**参加者** 15名(敬称略順不同) 守本保彦(昭和28年卒)、高見秀史(33年)、河野房子(35年)、橋本静子(36年)、白藤禮幸(36年)、五味尚子(37年)、浜島代志子(38年)、伊藤順子(46年)、池澤雅弘(53年)、川谷愛作(54年)、絹川ひとみ(54年)、田中勉(47年)、中野裕(36年)  
 ゲスト:文窓会本部から武藤美也子(本部長・43年)、廣野幸夫(本部幹事長・43年) 計15名

### 議 題

( 文窓会東京支部総会 議題: ① 13回の文窓会総会&木曜会開催について ② 今後の東京支部の文窓会の運営について )  
 ③ 東京六甲クラブの件 ④ その他自由発言

#### ① 第13回の文窓会総会&木曜会開催について、下記の通りご報告します。

- 1) 木曜会の講師選定を各学部で行うことが原則で、今回は昨年のホームカミングデイで講演され、好評であった芦津かおり先生のシェイクスピアの講演が良いと判断し、先生をお願いすることにしました。
- 2) 芦津先生との打ち合わせに、今年4月、田中副会長が神大文学部に出かけ、講演をお願いし、武藤会長のサポートもあり、快諾を得た。
- 3) 先生に来ていただくためには、大勢の文学部のOB・OGを集めるべく、機会あるごとにPRに努めた。その一環として、今回の総会および木曜会の案内について、残暑見舞いのハガキを事前に送ることにした。2017年8月末現在で: (1)今までの総会・木曜会に参加した方 (2)今までに文窓会本部の寄付金を納めてくれた方 (3)今までに六甲クラブ会員になってくれた方 をピックアップし、約100名に残暑見舞いのハガキを出し、事前通知をした。
- 4) 2017年10月:イメール&郵送あわせて、延べ約300名(郵送240名、メル友にも多数郵送した)に正式な案内を出した。この内返事あり:76名(ハガキでの返)&23名(メールでの回答)、住所不詳で返却あり:35名(住所調査後再送3通)となっている。
- 5) 芦津かおり先生には、木曜会で「シェイクスピアをめぐる驚きと感動の旅 ～ストラットフォード・ヴェニス・日本～」一時空を超え読み継がれる魅力の解明とその楽しみ方から別人説まで」の講演をお願いした。

木曜会参加者 (順不同敬称略):全学部からの参加者:41名 文窓会からの参加者:高見秀史(昭和33年卒)、河野房子(35年)、橋本静子(36年)、白藤禮幸(36年)、金山和子(36年)、五味尚子(37年)、伊藤順子(46年)、坂田あけみ(49年)、池澤雅弘(53年)、川谷愛作(54年)、絹川ひとみ(54年)、田中勉(47年)、中野裕(36年)、本部から武藤美也子(本部長・43年)、廣野幸夫(本部幹事長・43年) 計15名

#### ② 今後の文窓会東京支部の運営について

- 1) 文窓会東京の総会は、文学部担当の木曜会の開催にあわせ、開催してきた。今後もこの方針で取り進めたいと考えている。次回の文学部担当の木曜会は、2019年4月となる予定。(木曜会が10学部の持ち回りの関係で、しかも1・5・8・12月は除くので、再来年の4月となる)
- 2) 文窓会東京の役員を、本部と同じく、何人かをお願いして、毎年「役員会」を開催する方式を取りたい。ここに参加してくれている方に役員をお願い出来ないか。
- 3) 文窓会東京支部の人事異動:前回の文窓会で副会長をお願いした岡真知子さん(昭和47年卒)は業務の関係で、副会長を辞されることになりました。次の副会長が決まるまで、中野裕(会長)& 田中勉(副会長)の二名で運営していきます。

#### ③ 神戸大学東京六甲クラブの現状報告

文窓会東京支部は、文窓会本部の東京での支部であると同時に、東京六甲クラブの傘下に属している。(現在、神戸大学には、11学部あるが、2018年よりは、10学部になる。全て東京六甲クラブに所属している。この11学部のOBの方々の会費により、東京六甲クラブは運営されている)文窓会東京支部として、次の役職を担務し東京六甲クラブの運営に参画している。

理事:中野 裕 代議員:田中勉

文窓会東京支部としては、この会費増強(会員になってもらうこと)に日ごろから注力している。文窓会の会員は、23年度30名、24年度25名、25年度23名、26年度27名、27年度24名、28年度25名、29年度21名、30年度(2018年6月末まで)19名となっており、目標の80名には程遠い現状です。文窓会東京の会員の皆様のご尽力を切にお願いするものである。30年度(2018年6月末現在)の文窓会の六甲クラブ会員19名は下記の通りです。順不同敬称略:河野房子、白藤禮幸、橋本静子、中野裕、五味尚子、川島好子、野田弘三、柿本多美子、青木博子、錦織洋子、田辺久美子、北岡英子、伊藤順子、田中勉、村上好、新崎隆子、小野曜子、中川順子、松下直子。  
 (ご参考までに、2011年から2018年にかけて会員となった方は延べ46名となっており、上記の19名以外に27名存在するが、この内逝去・転居で非会員となった方が数名となり、目標の80名の会員募集には、相当のPRが必要になってくる)

( 東京六甲クラブは、1966年に開設され(開設時は東京凌霜クラブ、2011年に東京六甲クラブと改称)、2016年に創立50周年を迎えた、2016年、2017年と50周年種々の記念行事を行った。残すは、50周年誌の刊行である。 )

#### ④ 参加者の現況報告

#### ⑤ ゲスト

参加された本部の武藤美也子会長、廣野幸夫幹事長より、文窓会本部の現況報告があり、OB間相互の親睦と併せ、現役学生との親睦を深め、現役学生の活動補助、教授会との親密な連携、オックスフォード大学との交換留学の現状報告、ホームカミングデイのアレンジ、卒業お別れ会開催、新入生の歓迎会など、機に応じ、種々ピックアップされている状況の報告があり。さらには、文学部の入学定員の削減、文窓会終身会費の値上げ及び徴収方法の詳細な説明を受けた。

#### 文窓会東京支部へのお問い合わせは下記へ

事務局:〒223-0064 横浜市港北区下田町 1-1-113 中野 裕  
 TEL & FAX: 045-561-6317 / E-Mail: y.nakano.1938-panda@d9.dion.ne.jp

# 文窓会(文学部同窓会) — 会計報告 —

平成 29 年度収支計算書  
 (平成 29 年 4 月 1 日～平成 30 年 3 月 31 日)

平成 29 年度財産目録  
 (平成 30 年 3 月 31 日現在)

### 【収入の部】

前年度繰越金	¥21,425,886
今年度収入合計	¥4,378,719
会費納入金	(3,710,000)
協力金	(598,000)
行事受取会費	(69,000)
受取利息	(1,544)
雑収入	(175)
収入合計	¥25,804,605

### 【支出の部】

事業活動費	¥2,524,124
会報費	(1,342,196)
歓送迎会費用	(488,360)
総会費	(320,000)
文窓賞費	(227,258)
ホームページ管理費	(81,510)
名簿管理費	(64,800)
協力金費	¥630,000
学術助成費	(450,000)
学友会費	(110,000)
活動援助費	(50,000)
学祭援助費	(20,000)
事務局費	¥830,046
事務業務委託報酬	(600,000)
家賃・光熱費	(105,098)
通信費	(84,955)
消耗品費	(39,993)
支払手数料	¥31,302
郵便振替料	(30,462)
振込手数料	(840)
旅費交通費	¥113,390
会議費	¥116,374
交際接待費	¥124,500
租税公課	¥261
今年度支出合計	¥4,369,997
次年度繰越金	¥21,434,608
支出合計	¥25,804,605
(今年度収支)	(+) ¥ 8,722

I. 資産の部	¥21,434,608
(池田泉州銀行) 普通預金	(111)
(みなと銀行) 普通預金	(4,069)
現 金	(166,633)
(ゆうちょ銀行) 普通貯金	(785,559)
(みなと銀行) 定期預金	(1,006,887)
(みなと銀行) 定期預金	(1,509,436)
(ゆうちょ銀行) 振替口座	(3,896,690)
(ゆうちょ銀行) 定期貯金	(6,000,439)
(みなと銀行) 定期預金	(8,064,784)
II. 負債の部	¥0
III. 正味財産合計	¥21,434,608

事業年度に係る決算報告書を監査した結果、適正であることを認めます。

平成 30 年 8 月 8 日

会計監査 花 木 直 彦 印  
 会計監査 河 島 真 印

## 神戸大学学友会のご案内

神戸大学学友会は各学部同窓会の相互交流と大学の発展に寄与するため、同窓会の連合体として組織され、各学部同窓会から選出された人々による幹事会で運営されています。具体的な活動としては、幹事会や大学役員との懇談会のほか、大学広報紙「風」編集委員会、神戸大学クラブ (KUC) 運営委員会、データベース委員会などです。

### 神戸大学学友会を構成している同窓会：事務局は〈神戸大学企画部社会連携課〉

- 文窓会(文学部) ●紫陽会(教育学部・発達科学部・国際文化学部・国際人間科学部) ●社団法人 凌霜会(経済学部・経営学部・法学部・国際協力研究科) ●くさの会(理学部) ●社団法人 神緑会(医学部医学科) ●就進会(医学部保健学科)
- 社団法人 神戸大学工学振興会 KTC(工学部) ●六篠会(農学部) ●海神会(海事科学部)

### 「神戸大学クラブ」(K・U・C) に入会しませんか

神戸大学卒業生が学部の壁を越えて、交流をはかり親睦を深める集いです。(神戸、大阪、東京でそれぞれが活動を展開)

**ご入会ご希望の方は TEL 078-802-3113 までご連絡ください。(K・U・C 運営委員 日高 健一)**

### 文窓会ホームページをご利用ください!

卒業生や大学関係者のみなさんの交流の場です。いろいろな形で利用が可能ですので利用を希望される方は下記メールアドレスまでご連絡をお願いいたします。kobeuniv.sakamoto@gmail.com(担当:坂本/文窓 Web 担当、社会学 32 回生)

文窓会役員(平成30年9月末現在)

会長 武藤美也子 (43年卒・国文学)

<その他の役員>

日高 健一(36年卒・芸術学) 花木 直彦(36年卒・国史学) 三宅 征彦(41年卒・社会学) 田中 賢司(42年卒・社会学) 廣野 幸夫(43年卒・社会学)  
 吉田 浩次(43年卒・社会学) 西川 京子(44年卒・西洋史学) 田中 睦子(46年卒・芸術学) 坂本 直樹(59年卒・社会学)  
 河島 真(43年卒・国史学) 津田 薫(平22年卒・フランス文学)

表紙の題字は、文学部国文学教授 福長 進先生にご依頼しました。

http://www.kobe-u.biz/bunsokai/ (検索→文窓会)